

---

# 白と黒の虚像～トライアングル～

神童サーガ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白と黒の虚像～トライアングル～

### 【Zコード】

Z3222F

### 【作者名】

神童サーガ

### 【あらすじ】

テーマは「三角関係」の短編。叶いそうで叶わない想い。オリキヤラあり

(前書き)

初の別次元の話を書きました。今日(10/20)に誕生日が  
出ぬから...。

佐伯 さえき  
律 りつ

容姿・水色のショートヘアに水色の瞳

職業・高校生探偵（十三歳から始まり外国が主だった）

性格・悪いモノ大嫌い。照れ症（キザなのは苦手）

金澤 かなざわ  
彩 さい

容姿・金髪でキッドと同じ髪で金色の瞳

職業・怪盗ウイッチ（種も仕掛けも無い魔法）

性格・純粹だけど素直じゃない

備考・四年前から外国で怪盗やつてたが、高校生になり日本へ来た。  
律を溺愛。

「リツ～！！」  
「どうしたの？青子」  
「まだ捕まえられないの？キッドとウイッチ」  
「・・・ごめんなさい」  
「あっ、律は悪くないよーー！」

とある高校の2年B組。セミロングの髪の女の子が、両手を大きく

上下に動かしながら、水色のショートヘアの女の子に話しかけていた。

水色のショートヘアの女の子・・・律は悲しげに言った。セミロングの髪の女の子・・・青子は、すぐに否定した。

「なんの話だ？」

「あ、快斗・・・」

「昨日のキッズのことよ・・・黒羽くん」

「へボ警部も探偵も“また”やられたんだな」

「・・・」

「バ快斗！」

黒髪の少年・・・快斗は、嘲笑つた。それに悲しむ律。それを見た青子は快斗に怒った。

「警察と怪盗は相容れぬ仲だからな

「彩くんはどう思つの！？」

「俺か？・・・ウィッチの味方だな

「彩は毎回そうだよね！？」

話に乱入してきたのは、快斗と同じ長さの金髪の少年・・・彩だった。

キッドとウィッチというのは、今世間を賑わしてゐる怪盗なのだ。

キッドは、全身白でまとめ、モノクルを右目にしてる神出鬼没の人。ウィッチは、その反対で黒でまとめ、モノクルを左目にしてる神出

鬼没な魔女。

「捕まえるなんて馬鹿げてるぜ」

「それに関してなら俺も同意見だ黒羽」

「マジック出来るコンビだからって・・・」

「俺のは魔法だ。種も仕掛けも無いんだよ」

「はあ・・・」

夜になり、今日は怪盗キッドの予告田なのだが、具合口を悪くして、来れなかつた。

律は、ベットで寝てるとベランダから物音がし、ソッとカーテンと窓を開けた。

「つ キッ ドーーー！」

「今日来てなーいの心配しましたよ

「・・・」

キッドはお姫様にするように、手の甲に口付けた。

律の顔がトマトのように真っ赤になる。

「つ・・・心配・・・される」となんて・・・  
「具合はいかがですか?」

「つ・・・大丈夫だもん」

「ふふ・・・それは良かつたです」

「怪盗が探偵を心配しないでよ」

「一人の男としても、ダメなんですか?」

「！」

キッドの言葉に更に赤くなる。

頭から煙が出るんじゃないかといつぶらにフラフラだ。

そして、律の意識は途切れた。

「律ーーーーーーーー具合悪かつたんだな」

キッド・・・いや、黒羽快斗は自分に倒れてきて慌てて支えた。

「やーーまで具合悪かつたのか・・・スゲー熱だな・・・」

快斗は、律の部屋に入り込んだ。高級アパートの一室で、物があまり無い。シンプルでまとめられている。  
快斗は律をベットに優しく置いた。

「ちやんと食つてんのか?」

持ち上げた時、軽過ぎて壊れてしまつのではないかと不安になった。

タオルを濡らして律のオートに乗せた。

「……キッド何してますか？」

「……ウイッチですか」

ベランダから聞こえてきた声に驚いた快斗。振り返ると黒でまとめたウイッチがいた。

「……探偵に何の用ですか？」

「……その宝石は」

「残念ながらパンドリではあつませんよ」

「！」

ウイッチは、キッドに話しかけた。

キッドは話を逸らしたが、ウイッチの発言で少し表情が変わった。

「俺も探してんだ……黒羽」

「……何のことでしょう」

「俺の親父も関わりがあつてな」

「……」

「くくっ……俺は金澤彩だ」

「彩！？」

「取り敢えず、場所を変えよーぜ。律にバレたらな

「あ、ああ」

「……」ウィッチ・…・金澤彩は外に指を指しながら言つた。快斗は、それに賛同し、外へ消えてつた。

「ねえ律？」  
「なに？ 青子」  
「快斗達遅いね～」

次の日、病氣は治り、学校に来た。快斗と彩が来ないらしい。

「……青子って黒羽くんのこと、好きなの？」  
「！」

青子は律の言葉に真っ赤になる。律は、その様子に、ああ、と頷いた。

「り、律は彩くんはどう思つの？」  
「ただの幼馴染みだし・・・・それに・・・私は  
(キッドが気になるなんて・・・)

青子が快斗を好きなら、応援をしようと考へてる律。

でも、それ以上に探偵が怪盗に惚れるなんて・・・と後悔している。

「よつ！…」

「「きやつーー！」」

「黒羽齎かすなよ・・・

「快斗〜〜！ー！」

「大丈夫か？律」

「う、うん」

「具合良くなつたのか？佐伯・・・」

「な、なんで黒羽くんが知つてるの？」

「・・・？」

「律・・・具合悪かつたの？」

「！？」

「・・・顔色が、わりーからだよ！..な？黒羽」

「あ、ああーー！」

「・・・・そう？」

快斗の失言に律は怪しみが、彩のフォローでなんとかなつた。  
でも、怪しんだままだつた。

「せつとき何の話してたんだよ」

「黒羽くんつて・・・青子びづつ思つてる？」

「なつーー律ーー！」

「・・・」

「（分かりやすい二人だな）」

快斗と青子は真っ赤になつてゐる。律と彩は同じじいを思った。ついでに、良いなあ、とも思つたらしい。

「（キッドといいたいなあ）」

「（律と・・・）」

叶わない三角関係が出来上がつた。  
快斗と青子は、誰もが分かるだろ。ハ。律は、キッドといつ、禁断な想い。彩は、そんな律を想つてゐる。

この想いは、一生叶わないのか？

(後書き)

何となく三角関係で叶わないってのを作りたくなって書きました。  
連載とかなら叶っても良いかな?と・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3222f/>

---

白と黒の虚像～トライアングル～

2010年10月21日01時48分発行